

岐阜県民はライチョウが嫌いなのか？

岐阜大学応用生物科学部 准教授／動物園生物学研究センター長 楠田 哲士

はじめに

国の特別天然記念物でもあるライチョウは、岐阜県では、長野県や富山県と同様、県のシンボル「県鳥」に指定されています。岐阜県をはじめ、中部山岳の高山帯にのみ生息するニホンライチョウは、昔から神の鳥または神の使いとして崇められ、他の野生生物とは少し違ったまなざしを向けられてきました。

ライチョウという種の日本に生息する亜種がニホンライチョウですが、世界の生息分布の南限であり、極めて特異な存在です。このことは、氷河期の生き残りともいわれ、地球や日本の生物進化史の中で奇跡的なことといえます。そんなニホンライチョウが今、人間活動による気候変動等に起因する様々な影響を、直接的または間接的に受けて、絶滅の危機に直面しています。

そのため、特に2012年に環境省が発表したライチョウ保護増殖事業計画により、生息現地での生息域内保全や動物園での生息域外保全が活発に進められています。また、それ以前から動物園ではノルウェー産の亜種のスバルバルライチョウを使って、先行的にニホンライチョウの生息域外保全にむけた飼育技術の確立や研究が独自に行われてきました。これらの技

術がニホンライチョウに今転用されています。2015年と2016年の繁殖期に、岐阜県と長野県の県境に位置する乗鞍岳で、野生個体が産んだ卵を採集し、動物園での人工ふ化・人工育雛技術によって成長した個体が、現在の動物園での創始個体となっています。様々な課題を抱えつつも、動物園では個体数としては順調に増えており、2019年3月に、上野動物園（東京）、富山市ファミリーパーク（富山）、大町山岳博物館（長野）、那須どうぶつ王国（栃木）、いしかわ動物園（石川）で一般公開が始まりました。

筆者の動物繁殖学研究室では、それに合わせて、2011年から飼育下のスバルバルライチョウ、2013年から野生のニホンライチョウ、2015年から飼育下のニホンライチョウを対象に、動物園と共同で繁殖生理に関する研究を続けています。生息域外の動物園で、野生と同様に適切に飼育し繁殖させるには、どのようにしたらよいのか、光環境や気温等の条件とあわせて模索しています。本稿でこれらの研究内容やその意義を解説することも考えたのですが、研究の内容を語る以前に伝えたいことがあり、本稿では研究の話は割愛します。

私がライチョウに関わり始めて10年弱の中で、特に岐阜県内では危機的な問題があることに気が付き始めました。それは、「岐阜県民はライチョウが嫌いなのか？」ということです。嫌いというのは大げさですが、愛が無いのか、当たり前すぎて関心が低いのか…。そのことについて紹介しつつ、打開策を考えていきたいと思っています。

ライチョウに対する認知度

2020年2月23日、岐阜県獣医師会東濃支部主催の市民公開講座「絶滅の危機！ライチョウを守るために～私たちにできること～」が多治



図1 乗鞍岳のニホンライチョウ
(2013年6月23日、筆者撮影)

見市学習館で開催され、「神の鳥ライチョウの危機と保全」と題して講演を行いました。ライチョウに対する認知度を調べるために、アンケートを行い、参加者のうち60名から回答を得ることができました。このうち20代以上(～70代くらいまで)の回答者41名からの集計結果を図2に示します。県獣医師会東濃支部の研修会を兼ねていたため、獣医師会スタッフも含め獣医師が39%、一般が61%でした。

ライチョウを見たことがあると答えた人は30%程度で、一般的に考えれば非常に多い数字です。ライチョウが特別天然記念物、岐阜県の「県鳥」、絶滅危惧種であることを知っている人は、それぞれ80%程度であったのに対し、国の保護増殖事業が行われていることを知る人は60%程度、動物園が保全に関わっていることを知る人は40%程度、岐阜県の保護計画が進められていることを知る人は30%以下となりました。動物関係者であり、ライチョウに関心のある人が多く参加していたであろうことを勘案しても、ライチョウの絶滅危機への認知度の高さに対して、保全に対する認知度は低いことが分かりました。

岐阜県におけるライチョウ熱は…

岐阜県のライチョウ熱(関心の程度)は、長野県や富山県などとは比較にならないほど低いものです。それを疑わざるを得ない様々な事例を紹介してみたいと思います。

岐阜県では、ライチョウを県鳥に指定しているだけでなく、県警のシンボルマスコットも1992年からライチョウをモチーフにした「ら

びい」となっています。県警察航空隊のヘリコプターの名前も現在「らいちょうII」だそうです。先述のアンケートで、「らびい」の認知度は30%以下、県鳥と知っていた人に比べ3分の1程度でした。アンケート対象者のほとんどが東濃地域の人であったにも関わらず、西濃寄りの岐阜市の柳ヶ瀬商店街の非公式キャラクター「やなな」のほうが「らびい」よりも、はるかに有名でした。昨年(2019年)、県警は「らびい」に対して「力強さが伝わらない」ことを理由に、「岐阜県らしさ」を求めつつも鳥にはこだわらないという条件で、新マスコットのデザインを募集しています(朝日新聞、2019年12月29日付)。その結果、11の候補に絞られた作品が公表され、このうち2作品がライチョウをモチーフにしたものでした。2020年2～3月に、主に県民対象に投票が実施されました。4月下旬に決定予定だそうです。ライチョウをモチーフにした作品が選ばれてほしいと願っています(本稿が発行される頃には決まっているでしょうか)。

もっと身近な話として、ライチョウをモチーフにしたお菓子について考えてみたいと思います。様々なものがありますが、中でも最も有名なものが「雷鳥の里」でしょう(クリームサンドで、箱の中にライチョウの絵をかたどったカードが入っています)。よく見かけるお菓子の販売元や製造元を見ると、そのほとんどが実は長野県です。あとは富山県のもの、そしてライチョウを展示する動物園の所在県のものがごくわずかに見られます。私がざっと調べた限り、岐阜県産のものは見つかりませんでした(これから

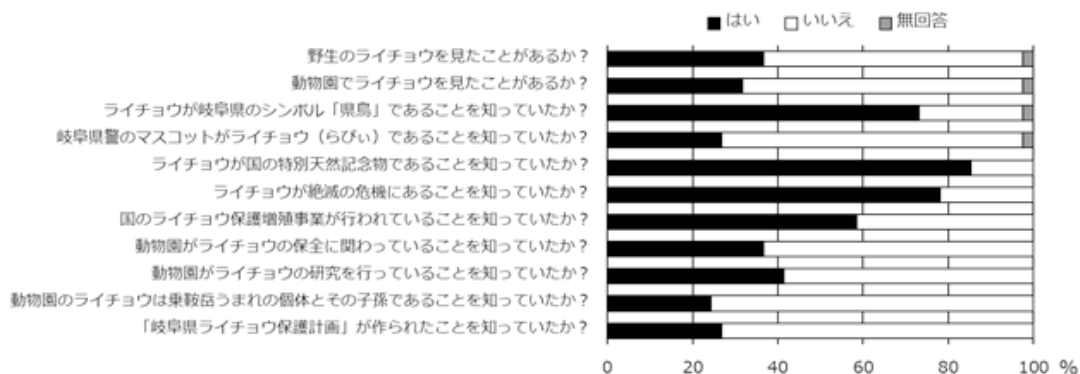


図2 岐阜県獣医師会東濃支部のライチョウに関する市民公開講座(2020年2月23日)でのライチョウ認知度アンケートの集計結果(20代以上の計41名で集計)

本格的な調査を行うつもりですが、もしあったら教えてください)。県鳥に指定している3県で比較しても、ライチョウに対する感覚がこういった身近なところでも随分違うことを感じさせられます。

岐阜県内の、とある有名な公園内にあるレストランのロゴがライチョウですが、そこに「grouse」という文字が添えられています。ニホンライチョウの英語は、ptarmigan (ターミガン) です。grouse もライチョウを表す単語ですが、これは冬に白くならないタイプのライチョウ類のことで、日本では北海道に生息する別種のエゾライチョウが該当します。もっと言えば、雷鳥の直訳のように思える「サンダーバード」は、ライチョウの英名ではありません。一般には、ジャイアントパンダの尻尾が黒く描かれるように(本当は白)、まだまだ知っているようで知らないのがライチョウなのかもしれません。

岐阜県は「清流の国ぎふ」として、公式キャラクター「ミナモ」という、川の水面(みなも)の妖精がいます。県地域振興課が文化やスポーツ、自然などとあわせて350種類ほどのミナモのデザインをWebサイトで公開しています。しかし、県鳥であるライチョウがどこにも見当たりません。このことに気が付いてから、県職員に再三お願いしているのですが、近く追加されることを期待したいと思います。ちなみに、県内最大のライチョウ生息地である乗鞍岳をもつ高山市(たかやまし)のデザインは、ライチョウではなく「さるぼぼ」(サルの赤ちゃん)と手をつないだミナモです。他の生息市である飛騨市は古川祭の起し太鼓とミナモ、下呂市は下呂温泉につかるミナモでした。

長良川や木曾川などの水面から、ミナモには高山帯のライチョウが見えないのかもしれませんが。ライチョウの生息する岐阜県北部の飛騨地方に降った雨や雪は、川や地下水となって一部は南部の美濃地方へ流れていくと思います。しかし、乗鞍岳などは日本列島の背骨「中央分水嶺」上にあるため、美濃地方の河川だけでなく、富山県側(あるいは長野県側)に流れていってしまい、ライチョウの痕跡が溶けこんだ水は、美濃地方には流れてこず、ミナモはライチョウ

に出会ったことがないのかもしれませんが。

岐阜県内では、ライチョウは北部の飛騨地方にしか生息していないこともあり、県民としては山の鳥というイメージがあるようです。また、生息地の高山市民ですら、山の鳥という感覚をお持ちのようです。美濃地方の鳥といえば、鶺鴒のウミウのほうが有名で、特に美濃地方の県民は、ライチョウに接する機会がほとんどありません。

岐阜県のライチョウ熱の低さの原因を考える

私が岐阜県民になってから20年弱となりますが、かく言う私もライチョウに関心を向けるようになったのは、動物園からの依頼を受けて繁殖研究を始めてからの、この10年くらいのことです。それまでは「県鳥」であることも知りませんでした。この10年弱の関わりの中で、岐阜県民がライチョウに対して、非常に関心が低く、県鳥に指定している3県の中では比にならないほどであることに薄々気が付き始めていました。

東京大学大学院農学生命科学研究科の深野祐也先生が非常に興味深いデータを出されています。過去5年間(2015年2月15日~2020年2月15日)の「ライチョウ」というワードのWeb上の検索量(Google Trends)では、ダントツに富山県が多く(100)、次いで長野県(70)、3位に石川県(26)が続きます。岐阜県はというと、第6位(14)で見かけ上は上位ではあるものの、ライチョウが生息しない東京都(12)や大阪府(10)などと検索量は変わらないレベルでした。この傾向はライチョウに限らず、そもそも岐阜県民はほとんどの動物園の動物に対して関心が低いようです。Web上(twitterでの調査)での動物の情報は、動物園や自治体が最大の発信者であり、それを受けて個人がリツイートして拡散させているようです。Webでの動物の検索量は、その都道府県内の動物園数と正の相関があることも明らかにされています。岐阜県には、残念ながら、その最大の発信源となるべき動物園(日本動物園水族館協会加盟施設)が1つもなく、全国でも珍しい県なのです。地元の動物園の存在はこのような形で県民に影響している可能性があることを、深野先

生の研究をもって痛感しています。

ライチョウに対する関心がダントツに高い富山県では、富山市ファミリーパークが中心となって、2017年12月1日から2018年2月28日まで、ライチョウ保全の取り組み対してクラウドファンディングを実施しています。目標金額をかなり高く1000万円に設定したものの、最終的に、たった3ヶ月間で寄附者1,174人、寄附総額26,265,000円という破格の偉業を成し遂げました（もちろんその裏側では、富山市の関係者の並々ならぬ努力があったことも確かだと思います）。Web上での寄附なので富山市民や富山県民だけが寄附者ではありませんが、動物園は、地元市民に動物に対する情報を提供し、関心を高め、その一部の人が寄附によって希少種保全に貢献しようとする理想的な流れを作る根源になっている可能性があることに気付かされました。

ライチョウを守る意味

ライチョウばかりを取り上げていると、よくこんな言葉を耳にします。なぜライチョウばかり大事にするのか？高山（こうざん）には、ライチョウ以外にも様々な生物がいるのに？岐阜県にはライチョウ以外にも多くの野生生物が生息しているのに？と。ライチョウは高山生態系の頂点ではありませんが、ライチョウが生活できる環境を残すには、ライチョウだけを守っても成功しません。ライチョウの餌となる高山植物や昆虫、ライチョウの隠れ家や営巣地となるハイマツ帯など、その地域生態系まるごとを保全する必要があります。近年は、低山のニホンジカやイノシシがライチョウの生息地に入り込み、大きな影響が出始めています。

ライチョウのいる自然は豊かである証であり、岐阜県の自然の豊かさの象徴であるといえ、シンボルなのです。岐阜県は「飛山濃水」ともいわれ、以前はあまり良い意味で使われていなかったこの言葉も、現在は岐阜県の自然の豊かさを象徴する言葉になっています。ライチョウが生息できる飛騨地方の高山生態系は、南部の美濃地方に豊富な水と淡水魚などを育み、それが鵜飼や美濃和紙といった岐阜の文化を育んできました（図3）。ライ



図3 「飛山濃水」の岐阜県のイメージ
ライチョウという希少種の保全は、岐阜県の歴史や文化の保全にも間接的につながっているといえます。ミナモのイラストは岐阜県の許可を得て掲載、ライチョウのイラストは岐阜大学動物繁殖学研究室オリジナルのもので、これに重ねることも許可を得ています。

チョウは岐阜県の自然の象徴でもあり、希少種としてのライチョウの保全は、岐阜の様々な歴史・文化の保全にもつながることを、改めて県民全員が認識しなければなりません。極論かもしれませんが、ライチョウが絶滅すれば、長良川鵜飼もなくなってしまうかもしれません。

岐阜県民のライチョウ熱を高めるために

最近、嬉しいことが2つありました。1つは、先述の市民公開講座にボーイスカウトの岐阜県連盟（多治見）の小中学生がたくさん参加してくれたことです。皆、制服を着て参加してくれたのですが、制服のワッペンがなんとライチョウだったことです（図4）。



図4 ボーイスカウト岐阜県連盟の制服のワッペン

もう1つは、岐阜県が主体となって2020年4月から「岐阜県ライチョウ保護計画」がスタートしたことです。この計画の主軸の1つに環境教育・普及啓発が掲げられました。富山県、長野県に続く、少なくとも第3位に、ライチョウ

に関心の高い県として岐阜県を引き上げたいと考えています。それを実現するために、私には今、2つの夢があります！

①まず、岐阜県民一丸となって、ライチョウが「県鳥」であることの意味や、その存在の大切さを再認識しなければなりません。そのために、2020年秋に「第19回ライチョウ会議岐阜大会」を、より関心の低い県南部の岐阜市内で開催する予定です。県内外から多くの方に参加していただきたいと願っています。同時に、関連イベントも計画しています。また、ライチョウの生態や危機と保全に関する一般向けの書籍を出版する計画も進めています。ライチョウやその周辺分野の関係者、総勢約60名のご協力を得て、これがあればライチョウのすべてが分かる本を作ろうとしています。まずはこれらを成功させたいと思います（新型コロナウイルスに打ち勝てるか…）。

②さらに、これはまだ私の妄想ですが、動物園のない岐阜県で、ライチョウを（岐阜大学で飼育して）展示公開して普及啓発を推進すると共に、私たちがこれまで以上に保全研究などに注力することを夢見ています。乗鞍岳はライチョウの一大生息地で、一大観光地でもあり、

全国でも珍しく、野生のライチョウに比較的容易に出会える非常に貴重な場所です。野生のライチョウに出会ったときの感動は一度経験すれば忘れられません。乗鞍岳へのアクセスや山頂までのルートは、初心者でもそれほど難しくはありませんが、登山愛好家でもなく動物や自然にそれほど関心の高くない人にとっては、高いハードルです。その乗鞍岳に導くためにも、岐阜県内で動物園のような、身近に出会える場所、多くの情報を県内外に発信できる場所が必要だと思っています。

この2つの大きな夢が叶えば、岐阜県（県外はもう高まっているので）のライチョウ熱も高まり、そして他の生息県や環境省などと一丸となって、神の鳥ライチョウを残していけると信じています。

岐阜県民の象徴であるミナモが2020年にライチョウと出会えますように！

謝 辞

本稿の作成にあたり、東京大学大学院農学生命科学研究科の深野祐也先生には、多くの貴重な資料と情報をいただきました。深く御礼申し上げます。

岐阜県ライチョウ保護計画について

岐阜県環境生活部環境企画課 宮 川 紀 子

岐阜県では、県内でのライチョウの主な生息山岳である、乗鞍岳、笠ヶ岳、御嶽山において、過去から定期的にライチョウの生息調査を行ってきました。平成15～17年には乗鞍岳、平成28年に御嶽山、平成29年に笠ヶ岳の調査を行い、県内のライチョウの生息状況等が把握出来たこと、平成24年には環境省において「ライチョウ保護増殖事業計画」が策定されたこと及び国内外での生物多様性保全意識が高まってきたことなどの理由から、平成31年3月に、「岐

阜県ライチョウ保護計画」を策定しました。

計画の策定にあたり、どのような計画にするかを決定していくために、まずは、ライチョウやライチョウを取り巻く環境の全国的な状況と岐阜県内での状況、他行政機関のライチョウ保護方策や環境教育の実施状況及び山岳環境の変化や登山客のマナーなどについて情報の収集やとりまとめを行いました。その結果、全国的にはライチョウを取り巻く環境は悪化しているが、県内各生息地においては、ライチョウの生

息状況やライチョウの餌や営巣に関わる植生状況はおおむね良好であることが分かりました。また、生息地においては外国人利用者が増加していることや立入禁止の場所に入っていくなどのマナー違反が見られることが分かりました。他行政機関のライチョウ保護方策については、「ライチョウサポーター制度」という、市民が行政の行うライチョウ保護事業に参加出来る制度が実施されていることが分かりました。この制度は、養成講習を受講した市民が登録し、自主的にライチョウの目撃情報の提供などを行うものでした。

これらの結果から、岐阜県におけるライチョウの保護対策は、ライチョウの生息状況等の調査による変化の把握と、ライチョウ保護意識や生物多様性保全意識を醸成する環境教育や普及啓発の実施に重点を置いた計画とすることとしました。

計画では、ライチョウの生息状況等調査については、県が定期的に行う調査及びそれを補完するための登山者等からの目撃情報収集を実施し、ライチョウの生息状況及びライチョウの生息に影響を及ぼす環境要因の変化の把握に努めていくこととしています。令和元年度は、山小屋利用者から、ライチョウとその生息に影響を及ぼす野生動物の目撃情報を収集することが出来ました。今後も継続して行っていく予定です。

普及啓発と環境教育については、専門家や保護活動団体の協力を得ながら、ライチョウに関するシンポジウムや小中学生を対象にした出前講座を実施していくこととしています。また、

生息地においては、ライチョウの生息地を訪れる際のマナーやルールの啓発を行うこととしています。令和元年度には、ライチョウ保護啓発のDVDを作成しました。このDVDは、乗鞍岳へ向かうバス内で放映したり、出前講座の資料として活用していく予定です。また、令和2年度には、ライチョウに関するシンポジウムを開催する予定です。

また、普及啓発の一つとして、「ライチョウパートナー」を運営することとしています。ライチョウパートナーは、他行政機関で実施されているライチョウサポーター制度のような登録制ではなく、また目撃情報の提供等をしてもらうものではありません。ライチョウ保護のために、「知る・伝える・参加する」という三つのことを自主的に行うことを宣言すれば、誰もがライチョウパートナーとなることが出来ます。ライチョウパートナーの運営により、ライチョウを知らない人々が、ライチョウに興味や愛着を持つきっかけとなること、さらにはライチョウを通じて高山帯の自然環境への関心や身近な自然環境の生物多様性保全の活動へと繋がっていくことを期待しています。ライチョウパートナーの募集は、令和2年度から開始する予定です。

計画に基づき県が実施していく対策については、関係機関と連携を図りながら進めていく予定です。そして、計画の内容については、必要な都度見直しを行い、適切なライチョウ保護対策を実施していきます。